

跡見花蹊筆和歌扇面と昭憲皇太后

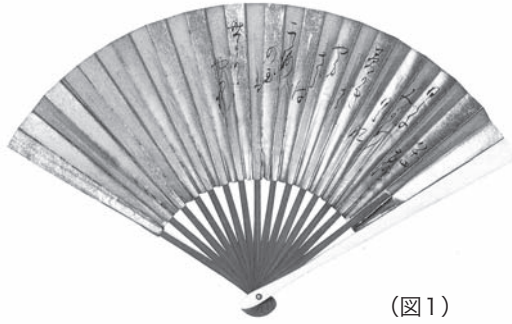
跡見学園女子大学 文学部 人文学科 准教授

植田 恭代

はじめに

本学所蔵の学祖跡見花蹊の作品のなかでも、和歌扇面(図1)は『跡見学園女子大学五十年史』をはじめ学園関連書籍等でしばしば紹介されてきた。その金地の紙面には、次の和歌がしたためられている。

八十四
花蹊
日々に
みかけ
日々に
みかきて
やま
さらは
ころも
の玉は
世にかゝ
やかむ



(図1)

「日々にみかけ 日々にみかきて やまさらは ころもの玉は 世にかがやかむ」というこの一首は、日々研鑽を積み、努力を惜しまず継続することによって真に内実が輝くことを詠む。花蹊八十四歳は大正十二年、これは晩年の作品である。その歌意は生涯を女子教育に捧げてきた花蹊の教えとしてふさわしいが、一つの作品はそれを取り巻く文化ならびに社会の所産としてあり、背後にある事情

を広く考慮して受けとめる必要がある。みがくという行為に日々の努力を重ねる発想は、ひとたび学外に目を向ければお茶の水女子大学の校歌にも通じ、一定の年代以上であればこの和歌からかつて馴染んだ唱歌が口をついて出てくるかもしれない。扇面に書かれたこの一首には、当時の女子教育事情とそのなかでの花蹊の志向が反映されているよう。

本稿では、この和歌扇面の一首とそれに関連する本学所蔵の作品をあわせて検討し、晩年の作品を考える一助としたい。

一、東京女子師範学校開校式と昭憲皇太后御詠

本学には、同様な発想による昭憲皇太后の和歌を花蹊が揮毫した別の資料も所蔵されている(図2)。

昭憲皇太后

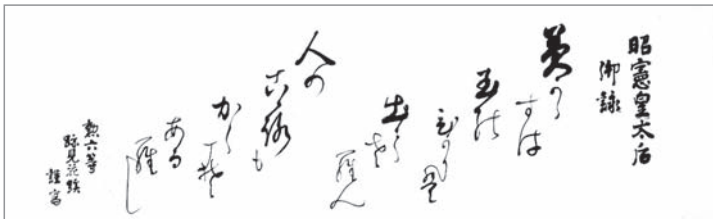
御詠

みかゝ
すは
玉の
ひかりは
出てさらん
人の
ころも
かくこそ
あるらし

勲六等

跡見花蹊

謹写



(図2)

昭憲皇太后の和歌は、玉はみがくことによつて光りかがやき、人の心も同様であると詠む。本来の語法は「みがかずは」であるが、この時代の通行としては「みがかずば」であつたと推察される。

花蹊は明治四十五年（一九四二）、七十三歳の時に「勲六等宝冠章」を授けられており、「跡見花蹊日記」同年七月七日条には、「午下式時過、突然文部省より叙勲相成付、礼服用、即刻出頭申来る」「大臣より多年功勞より勲六等宝冠章を授けられたり」とある（注一）。

現在確認できる、本学所蔵の玉をみがく発想にもとづく二連の資料には、花蹊の昭憲皇太后に対する敬愛の念がうかがえる。この花蹊晩年の作品は、東京女子師範学校開校式における昭憲皇太后の二首による。『昭憲皇太后御集 下』では「附載」の冒頭に二句以下の異同のある二首があり、「右明治九年二月東京女子師範学校に下し賜へる」とする（注二）。

ここで、昭憲皇太后の和歌が詠まれた事情を確認しておきたい。この和歌は、明治八年十一月二十九日、東京女子師範学校開校式に皇后時代の昭憲皇太后が行啓した時の御詠である。『昭憲皇太后実録』には（注三）、その日の次第が次のように記されている。少々長いが引用してみる。

二十九日 午前八時三十分御出門にて東京女子師範学校に行啓、開業式に臨みたまふ。乃ち著御の後、先づ文部大輔田中不二磨並に同校摂理中村正直以下の教員及び来賓アメリカ合衆国特命全權公使ジョン・エー・ビンガム夫妻以下の外国人に謁を賜ふ。尋いで正直の御先導により講堂に進ませられ、正直の教則捧呈畢れる後、左の旨を賜ふ。

女子教育の根柢を培益せん為め去年此校を設置有んとするを聞き嘉尚に堪へず今経営既に成り爰に開業の典を挙ぐ庶幾くは自今此校の旺盛に赴き遂に女教の美果をして全国に蕃結するを觀んことを

尋いで不二磨等祝詞を述べたる後、「同校教諭浅岡一の生理書を、生徒青山千世の勸善訓蒙を、同古川若菜の立志篇を、同古市洛の国史攬要を講ずるを聴かせらる。畢りて教場等を御巡覽あり、便殿に入御して休憩したまふ。此の間、先に講義せる千世・若菜・洛を召させられ、褒賞として罫画器具二揃宛を下賜あらせらる。既にして十一時同校御発、還御したまふ。尚本日來校せる不二磨以下の諸官員並に其の家族及び教員・生徒・外国人一同へ茶菓を賜ふ。又後日、同校に左の御歌を下賜したまふ。

みかゝすは玉もかゝみも何かせむ

まなひの道もかくこそありけれ

因に此の御歌は、同校に於て旋律を附し、生徒をして奉唱せしめてより、弘く人口に膾炙する

に至れり。

東京女子師範学校の開業式には、文部大輔の外にアメリカの特命全權公使夫妻も招かれ、新しい女子教育機関が発足する開業式の高揚感がうかがえる。その旨には「女子教育の根柢を培益せん為め去年此校を設置有んとするを聞き嘉尚に堪へず」とあり、若き日の昭憲皇太后がこの開業を大変喜ばしく受け止めている様子がよく伝えられている。この記述によれば、その「後日」に下賜されたのが、「みかゝすは」の和歌である。そしてこの和歌が同校の校歌となり、広く人口に膾炙したという。『お茶の水女子大学百年史』によれば（注四）、明治八年十二月二十日にこの和歌を賜つたとあり、翌月に下賜されている。

さらに、『お茶の水女子大学百年史』には、この和歌は明治十一年十月に伺いを経て式部寮雅楽課二等伶人討議季熙の譜により校歌として歌われるようになり、曲は「学道」という沓越調律旋のもので、墨譜、のちに五線譜となり、「みがかずば」と称されるようになったとも記される（注五）。

この詳細について『昭憲皇太后実録』当日の記述からは確認できないが、同明治十二年十二月二十八日条には、この歳に「みかゝすは」の和歌を鹿兒島女子師範学校に賜つたことが記されている（注六）。若き日の昭憲皇太后は、新しい学問にも意欲的であつた。明治八年十二月二十三日条に続く記述を、これも少々長いが一連の事情を把握するためにあげておく。

是の歳 冬月、四等侍講元田永孚、勸善訓蒙第三百十八章なるベンジャミン・フランクリンの教誨に関する一章を進講するに当り、フランクリンの自戒の為服膺せる徳目十二項に自註を加へ、手書して上りに、皇后深く感銘を受けさせられ、其の徳目の意を和歌に詠じたまひて永孚に下賜あらせらる。仍りて永孚も亦漢詩を作りて之に和し、以て皇后の御覽に供し奉れることあり。皇后の永孚に示したまへる御歌は彼の十二徳に関するものの外、虚誕に就きて詠ませられたる一首ありて、総て十三首なり。其の御歌は左の如し。

節制

花の春もみちのあきのさかつきも

ほとくりにこそくまゝほしけれ

清潔

白妙のころものちははらへとも

うきは心のくもりなりけり

勤勞

みかゝすは玉もひかりはいてさらむ

人のころもかくこそあるへき

沈黙

過たるは及はさりけりかりそおの

こと葉もあたに散らさゝらなん

確志

人こころかくこそあるへきしら玉の

またまは火にもやかれさりけり

誠実

とりくゝに作るかさしの花よりも

匂ふころのまことをそ思ふ

温和

乱るへき折りをはおきてはなさくら

まつ笑むほとをならひてし哉

謙遜

高ねをも底にうつして山みつの

ひきくにゆくを心ともかな

順序

奥ふかき道にもいらんものことの

はしめ終のみたれさりせば

節儉

呉竹のほとよきふしをたかへすは

すゑほの露はみたれさらまし

寧靜

事にふれ身はいかさまにくらすとも

ころはゆたになすよしも哉

公義

よろつ民すくはん道は近きより

おして遠きに行よしも哉

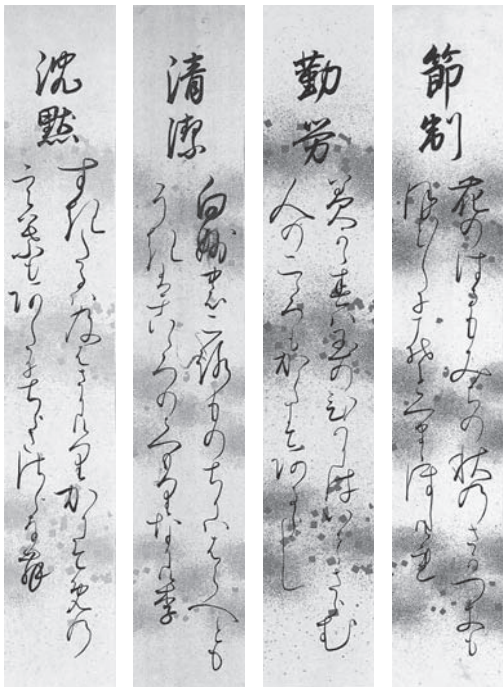
虚誕

はかりにし鳥の空値も関の戸の

明てのちこそあらはれにけれ

尚十二徳に関する御歌は御集に取められたるも、字句に若干の相違あるを拜す。蓋し後年の御推敲によるものなるべし。又御集は此等の御歌を明治九年の部に編次せるも、暫く永孚の後年自ら記せる年紀に従ひて茲に掲記す。

元田永孚がベンジャミン・フランクリンの二章を進講し、それに深く感銘を受けた皇后は「節制」から「公義」までの十二徳に「虚誕」を加えた十三首を詠む。その十二徳の和歌の三番目にある「勤勞」が、前掲の昭憲皇太后詠と似通う。『昭憲皇太后御集』「明治九年」では、「みがかずば玉の光はいでさらむ人のころもかくこそあるらし」と二句と五句に異同がみられ(注7)、のちの推敲によると考えられる。ちなみに、この十二徳の和歌のうち、最初の四首「節制」「勤勞」「清潔」「沈黙」を和歌短冊に記した花蹊の作品が本学に所蔵されている(図3)。「勤勞」二句五句は『御集』に同じ。この作品は、花蹊が昭憲皇太后のこれらの和歌を共感して受けとめた証しにほかなるまい。



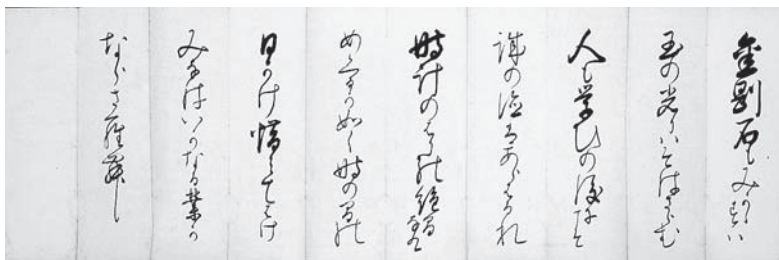
(図3)

「みがかずは(は)」で始まる昭憲皇太后の詠歌は、揺れも含みながらみがかくことを説く。初句の語感のよさも加わり、東京女子師範学校の開校式という晴れの場を得て、みがかく行為に努力を重ねる発想と昭憲皇太后の結びつきは揺るぎないものとして定着する。さらに、それが新聞等で報道されることよって広く人口に膾炙していく。

二、唱歌「金剛石」

本学所蔵品には、磨く行為に努力を重ねて奨励するよく似た発想の資料(図4)が、もう一点確認できる。

金剛石もみかゝすは
玉の光りはそはさらむ
人も学ひの後にこそ
誠の徳はあらはるれ
時計のほりの絶間なく
めくるか如く時の間の
日かけ惜みてはけ
みなはいかなる業か
ならさらむ



(図4)

これは、本学所蔵の法帖の文章末尾に記された「金剛石もみかゝすは」で始まる一節である。掲出部分の前半のみが本学園関連図書『跡見花蔭教育詞藻』(注8)に「花蔭女子書」として掲載されているが、法帖の一部にあたる。「義勇公二奉ス」として始まり人の生き方を説く法帖の末尾は、「貧賤の友は 忘るへからず 糟糠の妻は 堂より下さす 金剛石もみかゝすは 玉の光はそはさらむ」と続き「いかなる業のならさらむ」と結ばれる。金剛石、すなわちダイヤモンドもみがかなければ玉の光も輝くことはなく、人も同様に学んだのちにこそ真の徳があらわれるという一節は、時計の針のよう下賜した唱歌であり、『昭憲皇太后御集』には「金剛石」として次の「水に器」とともにあげられている(注9)。一定の年代以上であれば、「金剛石も」と聞いただけで口をついて出てくる歌詞であろう。『昭憲皇太后実録』明治二十年三月十八日条には、次のように記される。

華族女学校に御歌「金剛石」並に「水は器」の二篇を賜ふ。其の御歌は左の如し。

金剛石 　　みかゝすは
珠のひかりは 　　そはさらむ
人もまなひて 　　のちにこそ
まことの徳は 　　あらはるれ
時計のほりの 　　たえまなく
めくるかごとく 　　時のまの
日かけをしまて 　　はけみなは
いかなるわさか 　　ならさらむ

水は器
水はうつほに 　　したかひて
そのさまくくに 　　なりぬなり
人はましはる 　　友により
よぎにあしきに 　　うつるなり
おのれにまざる 　　よぎ友を

えらひもとめて もろともにも
こころの駒に むちうちて
まなひの道に すゝめかし

尚同校に於ては直ちに音楽課授業囑託奥好義に命じて御歌に曲を附せしめ、爾後生徒をして式日等に之を奉唱せしむることなせり。因に好義作曲の此の御歌は後年小学校教科書用唱歌集に「金剛石」・「水は器」と題して収録せられ、弘く世に行はるるに至れり。

この記述によれば、明治二十年三月には、昭憲皇太后御詠「みがかずは(ぼ)」から、華族女学校に「金剛石もみがかずは(ぼ)」という歌詞が下賜され、雅楽の奥好義により曲が付けられ、前述の『尋常小学唱歌』に収録、小学校教育に採用された。明治四十四年(一九二〇)大正三年(一九一四)にかけて文部省が編纂した『尋常小学唱歌 第五学年用』に「みがかずは」「金剛石」「水は器」が収められ、小学校教育という全国的な場を得て、「金剛石もみがかずは」というフレーズは一気に浸透していく。皇后御製の唱歌の下賜は、新聞でも報じられ、ほとんど周知されてもいる(注10)。『昭憲皇太后実録』同年五月十七日条には、華族女学校への行啓の際に、これらの唱歌が歌われたことも記される。

午後零時三十分御出門にて華族女学校へ行啓あり、上等小学科及び初等・高等中学科生徒の授業を覽たまひ、又生徒一同の唱歌「金剛石」・「水は器」を聞召され、畢りて三時還御あらせらる。

御詠をもととして唱歌となった歌を、実際に聞いた昭憲皇太后の喜びはいかばかりであったか。前述の和歌の初句でもある「みがかずは(ぼ)」は、古典和歌にはみられない語であり、こちらの「金剛石」も斬新な印象の語句である。五島美代子氏は、当時は『古今和歌集』の言葉が原則で、「金剛石」「時計の針」というのは新しい言葉を用いていることを指摘する(注11)。また、長沢美津氏は、校歌のない女学校で「金剛石」の歌が歌われたという(注12)。

あらためて顧みれば、「みがかずは(ぼ)」の和歌も「金剛石もみがかずは」という七五調のことばも、昭憲皇太后を中心に、女子教育を先導しその規範ともなる東京女子師範学校と華族女学校という存在を介し、小学校教育の場も得て広く人口に膾炙したフレーズである。

それを法帖というかたちに取り入れ、学びの途上にある生徒たちの書写の手本とし、文字の上達につとめながら心地よい七五調の響きとともに手習いをする人の心に刻まれるよう配慮したのが、ここに見出せる教育のありかたといえよう。

本学所蔵の花躰作品は、昭憲皇太后の存在を重く受けとめ、手習いにも溶かしこむ花躰の姿勢を反映している。

三、昭憲皇太后と女子教育

前掲の和歌扇面は、昭憲皇太后の和歌にもとづき、たどりみてきたような唱歌「金剛石もみがかずは(ぼ)」の浸透を背景に揮毫されている。初句の「日々にみがけ」と同様の歌語は、現段階で管見に入つたかぎり確認できておらず、これが花躰独自の初句と断定することには検討の余地がある。昭憲皇太后の文言を受けとめながらより強く日々の努力を奨励する命令形の初句は、御詠をさらに進めて訓育的な語調である。昭憲皇太后詠と少し趣きの異なる一首は、昭憲皇太后への敬愛を中核とし私学の教育現場にある花躰の姿勢を端的に表している。

昭憲皇太后は、すでに言及されているように、近代女子教育の発展に熱心な皇后であった(注13)。『昭憲皇太后実録』明治四年十一月三日条には、岩倉具視の使節団一行とともに渡航する我が国初の女子留学生五名を呼び、「其方女子にして洋学修行之志誠に神妙の事に候追々女学御取建の儀に候へば成業婦朝の上は婦女の模範とも相成候様心掛日夜勉勵可致事」という沙汰書などを下賜したことが記され、また明治八年二月一日条には、女子師範学校設立の趣を聞き文部大輔田中不二磨を御前に召して「女学は幼稚教育の基礎にして忽略にすへからざるものなり聞く頃者女子師範学校設立の挙ありと我甚た是を悦び内庫金五千円を下賜せん」との沙汰と金五千円を下賜されたことが記される(注14)。同月五日の『読売新聞』は、これを「東京へ女子師範学校が設立につき 皇后宮が之を聞こしめして幼稚を教へる基なれが当今なくてはならぬものと思めされ御手許金のうち五千円を此学校の入用にとて御差加へ遊ばされましたが実に有りがたい事では有りませんか」と報じている。女子師範学校設立の準備金を皇后みずから寄付したことが、新聞を介して広く世間一般に知らしめられたのである。

昭憲皇太后を有力な後援者とする女子教育の黎明期に、その御詠や下賜された唱歌を敬愛の念を抱いて採用し書写した花躰の姿が彷彿としてくる。

『昭憲皇太后実録』明治十二年四月十五日条には、三条実美邸への行啓の折に花蹊も同席していた記述が確認できる(注15)。

尋いで実美の御案内により庭中を御散策、桜花を覽たまひ、又跡見女学校校長跡見花蹊及び同校生徒たる実美女智恵子・皇太后宮大夫万里小路博房孫伴子・宮内省御用掛板倉勝達女棲・故麿香間祇候山内豊信女八重の御前に於て書画を揮毫するを御覽あらせらる。……略……又書画を御覽に供せる花蹊に白縮緬其の他を、生徒万里小路伴子等に夫々反物其の他を下賜あらせらる。還御あらせられしは七時頃なり。因に本日花蹊の描ける賤男の早苗採る図に実美の賛を加へしものは、頗る皇后の御感に適ひたるを以て御持帰りあり、毎年挿秧の期には之を御居室に懸けて御覽ありしと云ふ。

昭憲皇太后は、花蹊の描いた賤の男が早苗を採る絵に実美が賛を加えた作品をたいそう気に入り、居室に掛けて鑑賞している。花蹊からばかりではなく、昭憲皇太后の方も花蹊に近い思いを抱いている。

両者の交流についてはあらためて考察の機会を期したいが、まずは現段階で、明治十二年という時点でこのような親交が認められることを確認しておく。

花蹊の本学所蔵和歌扇面は、昭憲皇太后の存在とその影響下にある当時の教育事情、そのなかにある花蹊の姿勢を伝えている。そこには、同時代に修道会や宣教師によつて設立された女子教育機関とは異なるあり方がうかがえる。

注

- 1 『跡見花蹊日記』第三卷(学校法人 跡見学園 平成十七年)。
- 2 『昭憲皇太后御集 下』(文部省 大正十三年)。「みがかずば玉も鏡も何かせむまなひの道もかくこそありけれ」とある。
- 3 『昭憲皇太后実録 上巻』(吉川弘文館 平成二十六年)。
- 4 『お茶の水女子大学百年史』(「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会 昭和五十九年)。
- 5 注4 『お茶の水女子大学百年史』「第一章 東京女子師範学校時代」には、「十一年十月に何を

経て、式部寮雅楽課「等伶人討議季熙(のちに「等伶人となる)の譜により校歌として歌われるようになった。曲は「学道」という吉越調律旋のものです、墨譜であったが、のちに五線譜となり「みがかずば」と称するようになった。」と記される。

6 注3文献には、次のようにある。

是の歳 鹿兒島女子師範学校に左の御歌を賜ふ。

みか、すは玉もか、みも何かせむ

まなひの道もかくこそありけれ

因みに「等侍補士方久元、天皇の命を奉じ、本年五月中旬より八月初旬に至る間、高知・熊本・鹿兒島三県下の近況を視察せしが、八代学校及び鹿兒島女子師範学校の如きは辺陬の地に在り、且西南事変後未だ幾許ならざるに教育の進歩顕著なるものあるに感じ、両校生徒の作文・図画等を携へ帰りて天覧に供す。蓋し皇后も亦之を御覽ありて此の御歌を賜へるなるべし。

西南戦争後まもない時に、女子教育への配慮を示した行動と受け止められる。

- 7 注2に同じ。
- 8 『跡見花蹊教育詞藻』(跡見学園 一九九五年)。
- 9 注2に同じ。
- 10 『東京日日新聞』一八八七年三月廿七日、『朝日新聞』(大阪)一八八七年三月三十一日、同四月一日(訂正)など。
- 11 五島美代子「昭憲皇太后さまの御坤徳―御歌を通して―」『美しきまごころとおすがた―昭憲皇太后を偲び奉る―』(平成二十六年 明治神宮)。
- 12 長澤美津「昭憲皇太后の御歌について」(注11文献所収)。
- 13 小田部雄次「近代女子教育の模範」『昭憲皇太后・貞明皇后』(ミネルヴァ書房 二〇一〇年)参照。
- 14 注3に同じ。
- 15 注3に同じ。

附記

本稿の執筆にあたり、跡見学園女子大学花蹊記念資料館ならびに当館学芸員中出ひとみ氏の高配を賜った。心より感謝申し上げます。